

「富江の古代文化」について

松崎 義治

富江文化協会考古学部により編纂されたこの冊子は、昭和38年2月に刊行されたものであり、富江町の郷土史、特に原始・古代に関しては、先駆的な研究である。

この「富江の古代文化」が書かれた時代背景は、日本考古学界において、大陸に近い五島列島の存在が注目されはじめ、各大学機関で総合調査が開始された時期でもあった。

昭和37年、38年に同志社大学、九州大学、長崎県教育委員会による五島遺跡調査団が組織され、福江市の大浜遺跡、岐宿町の岐宿貝塚（寄神貝塚）の学術調査を行い、福江島における弥生時代遺跡の調査の成果を得ている。

「富江の古代文化」は、そのような時期に書かれ、富江の郷土史研究の発展を促すことになった。

内容的には、いままでに発見された遺跡・遺物の紹介、説明を記述し、その成果に基づき、富江の古代文化を評価していこうという試みが見られる。

執筆者達は、専門的には考古学という学問を研究したわけではないが、この「富江の古代文化」が後の富江郷土史研究の発展の礎となっていたことは否定はできないであろう。

では、この「富江の古代文化」がどのような経緯で発刊されたかを述べていきたい。

富江文化協会考古学部編となっているが、富江町における考古学的研究は、大正初期にさかのぼる。すでにこの時期地元出身の医師顥原正二郎氏、教諭の小西元氏らは熱心な遺物採集及び調査研究を行っていた。富江町の考古学的研究の先駆的存在である。

文中、富江古代文化研究のあらましには、大正4年10月に五島郷土会主催の展覧会に富江の採集遺物出展とあるが、これは福江島の郷土史愛好家主催による採集遺物の展覧会的性格なものであり、学術的に福江島の遺跡を見直していこうという気運はあまり見られなかったようである。

戦前、戦時中と空白の時期があるが、戦後、日本全国の遺跡の学術調査による成果が話題になるにつれて、富江町においても再度、我が町の古代文化を見直す目的で、昭和35年富江郷土研究会が発足した。その後、福江市に事務局を置く五島文化協会の発足に刺激を受け、37年12月に富江文化協会へと発展解消し、その中に考古学部を設置した。

この「富江の古代文化」は、富江文化協会の発足を記念し、会員が今まで採集した遺物に正式な評価を与えていこうと刊行されたもので、中心となったのは、当時測候所で執務していた小西倭で、大正期に地道に研究を続けていた小西元のご子息にあたる。以下、文中に記されている発足メンバーの人物紹介を述べていきたい。

今利寿人氏は、旗本富江藩家老の家柄に育ち、古文書関係に非常に強く、富江藩関係の古文書解読に尽力されたという。

釜我伊太郎氏は、当時富江町で洋服店を経営するかたわら、考古学に興味を持ち、遺物採集を続けており、発足メンバーの中では遺跡研究の先駆者的存在であったという。

河村包未氏は、三井楽町出身であり、遣唐使時代を中心とした古代を研究していたが、この会の趣旨に賛同し、発足メンバーに加わったということである。

堤六郎氏は、長崎出身で当時富江病院の薬剤師として勤務されており、富江町における考古学的な遺跡研究は、この人物によって根付いたといっても過言ではない。富江に赴任する以前から独自に研究を続けており、富江においては地元郷土史研究家達との活動の中で、自身の知識を郷土史研究家に与えていった。堤氏は、富江の考古学の第一人者であり、この「富江の古代文化」の執筆者でもある。

田中栄次氏は、発足メンバーの中では現在でも独自に郷土史の研究を続けている人物である。当時は郵便局に勤務されており、メンバーとの交流を通して次第に考古学に興味を持ち始めたということである。氏の採集遺物のコレクションは、石器、土器、自然遺物、数千点に及ぶ。

大久保犬太郎氏は、福江出身で当時富江高校の社会科の教諭であった。貞松福蔵氏、古賀勝氏の両富江高校教諭とともに活動を続けていた。

以上の郷土史研究家達を中心となり、富江の古代史研究をリードしていくことになる。

採集遺物については、各時代ごとに説明してある。

旧石器時代は、採集遺物の説明はしているが、そこには下関水産大学国分直一教授の説明を引用し、それぞれインドネシア、ヨーロッパ、アフリカなどの石器文化圏に属する石器であり、数十万年前の物である、と記されているが実物を見たわけではないので詳述できないが、疑問が残る内容である。

続く縄文時代の採集遺物の記述もすべて石器で占められている。

この採集地のほとんどが女亀であるが、その重要性は指摘してあるが、具体的な説明に乏しく、また、採集土器の記述もあまりされていない。その遺跡の年代指標となる土器（の型式等）に言及しなかったのは、富江における古代文化の構造を把握するよりは、富江の原始文化がどこまで遡れるかを追究することに主眼を置いていたらしく、ために石器採集に終始してしまい、文末においても富江原人の存在及びその痕跡の発見につとめようとする意気込みが文中から感じられる。

弥生時代においては、遺物は採集されておらず、文中でも弥生期における遺跡数の激減を指摘している。

古墳時代においては、若干の須恵器、土師器が出土しており、富江においてもこの時代の貴重な遺跡の存在を指摘し、今後の調査研究の成果に期待する旨の記述があるが、その後、富江町の対岸に立地する大浜遺跡の平成8年度における発掘調査では大量の須恵器が出土している。

最後に郷土史研究会という組織によく見られることだが、ややもすれば内輪だけの活動になってしまいがちである。

しかしながら、昭和38年当時、地方の郷土史研究会がこれだけの内容の冊子を刊行できたことは、地域研究史のうえでも特筆されるべき業績であろう。

これらの成果を基に、昭和39年の田中栄次氏による宮下貝塚の発見、翌40年の長崎県教育委員会、富江町教育委員会、長崎大学、別府大学による共同発掘調査へとつながっていった。そしてそのことが、富江町における郷土史研究のさらなる発展へとつながるべきなのだが、その後の研究は停滞してしまい、愛好家による遺物採集に留まってしまったのは悔やまれることである。